CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Waseda University Repository

書評

鈴木登美、十重田裕一、堀ひかり、宗像和重編
『検閲・メディア・文学――江戸から戦後まで／Censorship, Media, and Literary Culture in Japan: From Edo to Postwar』

金子明雄

右開きに頁を繰ればごく普通の日本語の書物として読むことができ、本の反対側から左開きに頁を繰ると、はじめに目に入る奥付が少し奇妙に感じられるものの、同一の目次構成を持つ英語の書物として読み進められ、同程度の分量からなる二つの言語パート（どちらも七頁からはじまる本文の終わりは、図版を含む日本語版が一八九頁、図版を含まない英語版が一九一頁）の間に、日本語式と英語式で併記された「執筆者一覧」が挟まる（頁の振り方としては日本語パート扱いなので、最終的に二つのパートは全く同じ頁数になる）。要するに、ほぼ同一内容の日本語版と英語版の二つの書物が一冊にまとめられているのだが、収録された論文には、日本語版がオリジナルであるものと英語版がオリジナルであるものの二通りがあり、日本語部分と英語部分は、全体として見る限り、どちらか一方がオリジナルで他方が翻訳という一方向的な関係になっているわけではない。このような「バイリンガル出版」（序、あとがき）という野心的な形態で出版された本書の意義を理解するには、この書物の〈国際性〉の意味をじっくり考えてみる必要がある。

編者の一人である鈴木登美の「序」と編者一同の署名の付された「あとがき」によれば、本書の原型は二〇〇九年三月にコロンビア大学で開かれた国際シンポジウム「Censorship, Media, and Literary Culture in Japan: From Edo to Postwar」（本書の英語版タイトルとなっている）であり、同年に開設された早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WIJLK）におけるコロンビア・プロジェクトの中で論文集としての企画が具体化されたとのことである。日本語圏の研究者、英語圏の研究者に、さらにフランス語圏の研究者を加えた「実験的なシンポジウム」（あとがき）の成果をまとめた書物が、論文筆者のラインアップからも容易に察せられる文化的・言語的多様性を体現することはきわめて自然な成り行きにも思われるが、もっぱら研究領域の一体性と研究文脈の多様性をディスプレイすることに力を注ぐ傾向が目につかなくもない、昨今の国際的研究プロジェクト流行りの延長線上に本書を置いてしまうと、その〈国際性〉の真価を見失うおそれがある。

「序」に簡潔にまとめられているように、一九七〇年代後半から顕著になる日本における戦前・戦中の検閲に関する研究の進展は、占領時に接収された内務省関連の資料群などの公開や部分返還を基礎とするものであり、一九八〇年代以降に大きな発展をとげる占領期検閲に関する研究は、プランゲ文庫に代表されるGHQ関連資料のマイクロ化、データベース化にその多くを負っている（そもそも前述したシンポジウム開催の契機も、プランゲ文庫雑誌データベースを活用して編集された岩波書店『占領期雑誌資料体系』の刊行とのことである）。日本における検閲に関しては、「占領期および戦

前・戦中の一次資料の多くが米国に接収・保管され、その整理やマイクロ化が両国の共同作業で行われてきた背景や検閲資料の言語的性格から、日本語でも英語でも研究が行われてきた」（序）のである。その意味で近代日本の検閲をめぐる諸問題は、それ自体がすでに国際的な研究課題なのである。にもかかわらず、日本語で行われた研究と英語で行われた研究は、原著刊行一九八四年のジェイ・ルービン『風俗壊乱』の日本語版出版が翻訳者グループの努力にもかかわらず二〇一一年までずれ込んだことに象徴されるように、「相互になかなか伝わりにくかった」（序）状況があったことも確かである。本書の原型となったシンポジウムは「日本文学における検閲に関する研究が日本語圏と英語圏において目的や方法が異なり、研究成果も共有されていない状況に一石を投じる」（あとがき）目的で企画されたとされる。つまり本書の主題である日本の文芸検閲は、たまたま言語的多様性を有する研究者グループの研究課題として選ばれたのではなく、本書によって文化的・言語的に異なる互いの研究文脈を翻訳し、交錯させることによって深化されるべき研究領域として再定位されたのである。ここに本書の〈国際性〉とその主題との必然的な脈絡が見出せるのである。

そのような観点から本書の内容を眺めると、近年めざましい成果を挙げつつある「内務省委託本」関連の研究や、内務省による検閲の実態にかかわる実証的研究など、日本語圏から英語圏に発信すべき研究が紹介されていることは喜ばしいし、ＧＨＱによる占領期の検閲をアメリカ側のアイデンティティの政治学と結びつける英語圏の研究は、事態に対する新鮮な視角を提供してくれる。それらの論文が互いに異なる研究文脈の共有という意味で、国際的研究プロジェクトの基盤の形成に寄与すると思われるのに対して、より直接的な意味で言語的・文化的翻訳に関わる問題を設定した研究は、国際的研究の未来を占う意味できわめて重要である。例えば、マーリン・Ｊ・メイヨ「純潔への頌歌」は、プランゲ文庫が所蔵する比較的マイナーな詩歌雑誌を取り上げ、米兵と日本女性の「親密交際」が「タブー・トピック」として扱われた実相を検証しているのだが、同時に、日本語でのオリジナルな表現とＧＨＱによる検閲という行政的措置との間に介在する翻訳の問題をあぶりだす論でもある。なぜならば、日本人検査官の翻訳に基づいてＰＰＢ高等検閲官によってなされる検閲の仕組みには、翻訳を介した文化的・言語的文脈の変換による意味の変容や、翻訳行為に内在する政治的無意識の問題が必然的に絡むからである。読者は「バイリンガル出版」の日本語版と英語版とを対照することで、そのような問題領域の微妙なあり方を実際に確認することができる。また、高榮蘭「拡張する検閲『帝国』と『非合法』商品」は、異なる言語の間での翻訳にとどまらず、「帝国」日本の外延での商品としての書物や雑誌の流通・移動とそれを可能にする市場的ネットワーク、それに付随する価値の伝播・変換にまつわる諸問題を、いわば商品としての書物・雑誌が空間的な位置を変えることによって翻訳される過程として辿っている。そこでは、検閲する主体と検閲される主体との間はもちろん、検閲を受ける側にある諸主体間の微妙な距離の存在とその距離の作用が問

題とされている。これまで、特定のシニフィアンをめぐる意味論的闘争として、あるいはコミュニケーションの切断・断絶として語られることの多かった検閲過程を、輻輳的な断層やねじれをはらんだ不連続的なコミュニケーション過程として捉える視角が興味深い。

そのようないわば方法論的〈国際性〉に加えて、本書には検閲研究のパラダイムにかかわるもう一つの目論見が存在する。「序」は、前述のシンポジウムにおいて「占領期の検閲問題と戦前・戦中の検閲問題との相関性を明らかにすることの重要性と、出版文化やメディアの発展・変容の理解に近世以降の検閲・統制状況を総合的に視野に入れることの有効性を確信したこと」が、本書の構成に「反映されている」とする。出版文化の本格的な展開の見られる近世以降の検閲について通時的・歴史的アプローチを取っていること、文学を中心とした出版文化に限らず、視聴覚文化を含めた広範なメディア連関についての共時的・クロスメディア的アプローチを重視していることが、本書の構成上の大きな特徴となっている。近世から昭和戦前期までの検閲を扱う第Ⅰ部、戦前・戦中から占領期・戦後にまたがる問題領域を扱う第Ⅱ部、主に占領期以降を扱う第Ⅲ部という三つのパートによる構成は、日本における検閲の全体像を通時的・歴史的な観点から把握しようとする姿勢と対応しており、また、江戸歌舞伎や浮世絵、ニュースフィルムや紙芝居など、多様な視聴覚メディアが話題の中心となる論考は、メディア状況を共時的な相互連関性の中で扱う志向のあらわれであろう。戦前・戦中の検閲と占領期の検閲の相関性に焦点を定めた歴史的パースペクティブの構築については、目次構成の上で若干の不透明さ・不徹底さがあるようにも見えるが、今後の検閲研究の方向性についての示唆として重要であろう。また、検閲という問題領域における視聴覚的な大衆メディアについては、まだまだ考えなければならない事柄が存在することを教えられた。文学者たちの住む文学という文化領域とさまざまな視聴覚メディアが混在する大衆文化領域とが、依然として有効な接続の論理なしに二分化されている印象をうけるのはいささか残念なことではあるが、この問題領域でメディア連関（あるいは間テクスト性）という発想をどこまで共時的に展開できるか、あるいはその通時的な様態の記述に向かってどのように視野を拡げられるか大いに期待が持てる。

もちろん、いかなる周到な準備のもとで実現された書物であれ、日本における近世以降の検閲という問題領域に対して、それ一冊で満足のいく解決を提供するのは不可能であろう。しかしながら、最先端の学問的成果を取り込みつつコンパクトにまとまった一三本の論文と、具体的で興味深い話題を提供し研究の方向性に示唆を与えてくれる五本のコラム、そして最新の研究動向も含め各パートに対応する検閲研究を手際よく概括し、そこに配置される論文の意義を説明するパート毎の解説で構成される本書は、その親切で丁寧なつくりによって、日本語圏と英語圏において今後この問題領域での研究を行おうとする若い研究者に善き導きのひかりを提供してくれるであろう。それと同時に、日本語圏の研究者と英語圏の研究者に、互いに異なる研究文脈の情報を提供す

るばかりでなく、国際的な研究課題を扱うことの意味を認識するヒントを与える役割を見事に果たしているのである。

（二〇一二年四月　新曜社　A5判　三八二頁　税別三九〇〇円）

新刊紹介

中山弘明著

『戦間期の『夜明け前』——現象としての世界戦争』

本書は島崎藤村『夜明け前』を戦間期（第一次世界大戦と第二次世界大戦の間）という文脈に布置し直す試みである。『夜明け前』は一九二九年に「中央公論」誌上で連載が始まり、全体が完成したのは一九三五年のことであった。それまでの私小説的な作風を離れて、日本の開国から明治維新という歴史的な題材を背景に、自らの父親をモデルに採った本作は連載当初から様々な反応があったが、その評価はいわゆる十五年戦争中に形成された。そして、後の議論もそのような同時代の評価を前提としたものであった。従って、ベルサイユ条約が締結された一九一九年から一九三〇年代という時代状況の中で、漱石山脈、長谷川天溪、村山知義といった人々を補助線として『夜明け前』を読む本書の問題設定は、藤村研究における新しい議論の一歩になっている。

（二〇一二年十月　双文社出版　A5判　三〇二頁　税込四四一〇円）〔栗原　悠〕

東郷克美著

『井伏鱒二という姿勢』

本書では、井伏鱒二という人物に様々な角度から迫ろうと試みられている。

「幽閉」、「さざなみ軍記」、「多甚古村」、「黒い雨」等の代表作を時代順に並べ、ひとつひとつの作品を子細に考証することにより、井伏の文学的「姿勢」やその変化を知ることが出来る。井伏の私生活にも多く言及されており、総合的に井伏の「姿勢」に迫ろうとしている。他の作家（太宰治や森鷗外など）との交流が井伏にとって重要であったことにも触れられる。

本書では「戦争」と井伏との関係にも重点を置いて描かれている。従軍生活も送っていた井伏にとって戦争は「悪夢」であり、その後の作家生活の「姿勢」を方向付ける大きな経験となった。

本書には厖大な資料が用いられ、著者の研究のひたむきさにも心がうたれる。

作家・井伏鱒二の奥深さがうかがい知れる一冊である。

（二〇一二年十一月　ゆまに書房　A5判　三一七頁　税込二九四〇円）〔松本　海〕